

レイバーセンターが取り組む労働教育

あおの
青野

えみこ
恵美子

●明治大学労働教育メディア研究センター 客員研究員

はじめに

明治大学における寄付講座をはじめとする労働教育の取り組みは、レイバーセンターの存在なしには語れない。私たちは大学におけるレイバーセンターに注目してきた。そこでの寄付講座を実践した経験から、労働教育の課題についてまとめた。

1. なぜ大学にレイバーセンターをつくったのか

2005年に発行された「国際労働研究センター」¹の会報に、次のような文章がある。

「ここ1、2年の間に、新しい活動領域を開拓するための議論が進みました。ひとつは労働教育の再構成と言う課題であり、もうひとつは調査研究と運動とを結びつけるレイバー・センターの構想です。いずれもアメリカの労働運動の経験から示唆を得たものですが、純粋の運動団体と純粋の

研究団体との中間に位置するような、研究と運動とをつなぐような組織と活動のあり方を意味しています。」²

アメリカの労働運動の経験について、私たちに衝撃と共に伝えたのは、ケント・ウォンさん（カリフォルニア大学ロサンゼルス校労働研究教育センター：以下、UCLAレイバーセンターの所長）である。2003年に来日したウォンさんは、低迷する労働運動の活性化のために、労働教育がいかに大切であるかを熱く語った。「国際労働研究センター」のメンバーだった研究者や活動家たちは、伝統的な労働教育とは異なるアメリカ労働運動の改革派が採用していた民衆教育（Popular Education）に注目し、さらにレイバーセンターに強い関心を持ったのである。

私が所属する「明治大学労働教育メディア研究センター」の源流は、上記にある。2007年に一橋大学、2008年に明治大学、2017年には一橋大学から法政大学へ、そして2021年に3つめのセンター開設と、2022年現在、2大学に3つのレイバーセンターが存在する。その過程で、多くの日本人研

1. 1995年に設立された在野の労働研究団体
<http://www7a.biglobe.ne.jp/~ctls/>

2. 田端博邦「国際労働研究センターの今後の方向性について」『国際労働研究センター会報』8号、2005年12月。

究者や活動家たちが、ウォンさんをはじめとする「UCLAレイバーセンター」と交流を続け、その存在は逆境と言える労働運動のなかにある私たちに勇気を与え続けている。

2. 当事者を出発点に～ 「UCLAレイバーセンター」 からの学び

「国際労働研究センター」のメンバーは2004年、「UCLAレイバーセンター」³の活動について調査した。同センターは、ロサンゼルス産業構造の変化を反映して、サービス産業や移民・マイノリティ労働者たちの組織化と運動に力を入れていた。その目的のために採用したのが、労働運動と連携して内部の活動家や労働者と共に行う「アクション・リサーチ」(参加型行動調査)である。さらに、ウォンさんが強調した労働教育は、民衆教育手法を使って労働組合や労働者センター(労働NGO)、コミュニティ組織において、現場の活動家や労働者たちに熱心に行われていた。知識やイデオロギーを注入する教育ではなく、労働者自身が持っている経験を出発点に、課題の提起と対話によって学んでいくという方法である。⁴

さらに大学では、労働専攻コースや労働組合や労働NPOへのインターンシップ・コース、学外

向けには、短期集中の組合役員・スタッフやマイノリティ・女性・LGBT向けのリーダーシップ・コース、個別組合からの委託を受けた研修などである。

「UCLAレイバーセンター」から刺激を受けた日本人たちは、上記のような調査や教育を、自らの組合やNPOでも実践してきた。私が2008年から参画した明治大学での労働教育の取り組みも、その一つと言える。

2008年と言えば、リーマン・ショックの影響により派遣切りが起き、年末には生活困窮者への支援として「年越し派遣村」の運動が盛り上がった。当時の大学生たちの意識を振り返ると、派遣労働者の境遇を「負け組」と表現し、自己責任を強調する姿勢が目立っていた。しかし、数年後には「勝ち組・負け組」と表現する学生は教室から消えた。そして、寄付講座の開講と同時にスタッフとして参加した私自身の意識も大きく変化した。より深刻化する労働問題に取り組むには、「当事者の声を聞いて、それを我が事として引き受ける」という想像力を育むような労働教育が何よりも大切であると痛感するようになっていた。

3. 青野恵美子、高須裕彦「ロサンゼルス新しい労働運動とその社会的基盤」国際労働研究センター編『社会運動ユニオンズ アメリカの新しい労働運動』2005年、緑風出版。

石川公彦「アメリカの大学におけるレイバーセンターの機能：UCLAレイバーセンターの取り組みから」『労働法律旬報』1766号、2012年4月25日。

ケント・ウォン「新しい労働者階級のための新しい労働運動と労働教育」『労働法律旬報』1855-56号、2016年1月25日。

4. アメリカの大学のレイバーセンターの具体例については以下を参照されたい。

高須裕彦・小畑精武「大学と労働運動、社会運動をつなぐ橋：アメリカの大学のレイバーセンターとは何か(上)」『労働法律旬報』1690号、2009年2月25日。

鈴木玲、青野恵美子、山崎精一、中島醸「大学と労働運動、社会運動をつなぐ橋：アメリカの大学のレイバーセンターとは何か(下)」『労働法律旬報』1692号、2009年3月25日。

マット・ノイズ(石川公彦訳)「労働者教育の問題点：ニューヨーク市立大学に拠点をおく複数の労働者教育センターにおける教育実践から」『労働法律旬報』1694号、2009年4月25日。

3. 明治大学での寄付講座

「明治大学労働教育メディア研究センター」は2008年に開設され、2009年から「自治労寄付講座」、2010年から「労働講座企画委員会寄付講座」を、全学部生向けに開講している。これまでに心がけてきたのは、学生に労働問題への関心を持ってもらうために、どのような講義内容をつくるのか、ということである。

レイバーセンターは前述のように、研究と労働運動、研究者と活動家・労働者をつなぐ役割を担ってきた。私はそれまでの映像制作の経験を生かして、労働現場と教室をつなぐことを意識した映像教材の作成を担当した。「自治労寄付講座」⁵では、それらの映像教材を上映し、公共サービスに従事する組合員がリアルな労働現場について紹介している。

一方、「労働講座企画委員会寄付講座」⁶は、開講前に若手の組合職員や大学院生を集めて、シラバス作成のためのワークショップを開催した。そこでは、労働映画の上映や、就活や職場経験についてのOB・OGへのインタビュー、学生のアルバイト・アンケートなどが提案されて実現している。この講座でも、さまざまな労働現場の労働者や組合役員が登壇し、ジャーナリストや弁護士、研究者が分析・解説を加えた。

上記のような取り組みができたのは、チームとしてのレイバーセンターの枠組みがあったからである。そのイメージは「UCLAレイバーセンター」にある。その規模や活動内容は比べものにならないが、お手本になったことは間違いない。

4. 労働教育の課題

先日、寄付講座に登壇している明治大学OBから、次のような3つの質問を受けた。

- Q1 リアルな労働実態は、学生の不安を煽って働くのが怖いという意識にさせるのでは？
- Q2 労働者の権利について学んでもなお、学生は声を上げることを諦めているのでは？
- Q3 団結や連帯という言葉の意味について、学生にどのように伝えたいのか？

寄付講座を実施するにあたり、どれも実際に悩み取り組んできた課題である。

質問1については開講直後から直面した。当時は「過労死」が大きな社会問題となり、マス・メディアを賑わしていた。講義のなかで直筆の遺書が紹介された時には泣き出す学生が出るなど、当日の学生の感想文に少なからぬ働くことへの不安が綴られていた。この講義を機に、受講を辞めた学生もいる。しかし、私たちはその後も「過労死」に関する講義を続けた。

それから数年をへて、なぜか感想文に上記のような不安を綴る学生はいなくなった。確証はないが、その時期は「勝ち組・負け組」の言葉が教室から消えた時期とオーバーラップしていたような気がする。開講当初の受講生の多くは、自らを「負け組」とは無縁であると感じていたはずである。しかし、就職間もない大卒社会人の「過労死」を前に、受講生たちは自分事として向き合う勇気を得たのかもしれない。

質問2と3については、最善の答えを今も探している。労働者の権利も団結も、長い歴史の過程

5. 労働教育研究会「大学における労働教育の模索：労働組合とのコラボレーション」『労働法律旬報』1892号、2017年7月25日。

6. 青野恵美子「大学における労働教育：労働講座の実践から学ぶこと」『労働法律旬報』1740号、2011年3月25日。

で勝ち取ってきたものである。当時の労働運動の記録から学ぶことは近道と言える。また、国内外を問わず労働問題に取り組む現場の事例を集めて、当事者の姿を可視化することを心がけている。そのうえで、当事者と学生の対話、学生同士の議論を経て、問題の解決に向けて個人が考え続けることである。そのための学びの場としての寄付講座を、多くの人々の協力のもとに続けていきたい。

コロナ禍を経て、私たちは厳しい労働の現実直面している。時に目を覆いたくなるほどである。変化する労働・社会環境のなかで、講義内容もスタイルも再考を求められている。それでもなお、声をあげる労働者をつながることが学びの出発点であることには変わらない。「UCLAレイバーセンター」とは今年、オンラインでの交流が始まった。